
魔法少女リリカルなのは ANOTHER AGITO STORY

矢部野 和麻呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ANOTHER AGITO STORY

【Nコード】

N1954P

【作者名】

矢部野 和麻呂

【あらすじ】

木野 薫・・・アナザーアギト・・・

彼は一人のアギトを命を賭けて救い・・・この世を去った

だが世界は、彼のような男が必要だった・・・

そして木野 薫は、異世界へと・・・訪れた・・・

プロローグ

「浩二…コーヒーを頼む…」

これが最後の・・・木野 薫の最後の言葉だった

そして彼は・・・死んだ

人類は、優秀な医者をも一人失った

彼は数々の人の命をその手で救い、さらに影から人々をアンノウンから守っていた・・・

津上 翔一・・・仮面ライダーアギト・・・彼も木野 薫に助けられた男・・・

木野 薫がいなければ、彼は生きていなかった・・・彼が生きてられるのも木野薫という男がいたおかげである

（俺は、・・・死んだのか・・・）

木野 薫は暗闇の中にいた・・・

（ここは・・・地獄か？）

彼は、人々を助けたという同時に、アギトを自分以外殺そうとした・
・

だが翔一と出会い涼に出会いかれは少しずつ改心していった

（自分はあるなことをした・・・地獄にいても当然か・・・ん？）

彼は一筋の光を見つけた

（あれは？）

そう思うと同時に、光はこちらへ向かってきた

（なんだ？ あの光こっちに向かって）

そう思うと同時に

木野 薫は、光に包まれた・・・

一話 始まり(前書き)

すみません!!

妄想が抑えられなかったんです!!

一話 始まり

「う・・・」

目眩がする・・・木野がそう思った瞬間

「あれ、起きました？」

木野は声のする方へ向く

そこには金髪の少女がいた

「貴方は？」

「私はフェイト・テストロッサといいます

ここは私の部屋です」

「何故私はここにいますのでしょうか？」

「年下だから敬語でなくていいですよ」

「むう、わかった」

「ええと、貴方が道端に倒れてたのでとりあえず家に運びました」

「そうか、ありがとう」

スッ

フェイトは木野に鍵を渡した

「すぐ近くにあったので貴方ではないかと・・・」

「・・・そのようだ、ありがとう」

「いえいえ、御構い無く、バイクもすぐ近くの駐車場にあります」

「・・・一人もつてきたのか？」

「・・・もう一人いるんですけどちょっと出かけてて・・・」

「そうですか・・・」

「あの、貴方は？」

「そういえば名前をまだいってなかったね、

私は木野 薫、元医者でしたがある理由があって辞めました」

「そうですか、あの、どうしてあんな所に？」

「わからない、気づいたらここにいた、う！」

木野は頭を押さえてうずくまる

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、そろそろ私も出かけるとします」

「あの、また来てもいいですよ」

「え？」

「いえ！ なんでもないです！」

（フラグ？・・・）

木野はそう思ったが、すぐ考えを打ち消した

「では、そろそろ」

「ええ、では！」

ガチャ

「さようなら」

ギィー、ボタン

「・・・」

ファイトは一人、考えていた

ブウウー——ン

木野は、バイクに乗り、図書館へ来ていた

(・・・なんということだ・・・)

そんなことがありえるのか？

いや、もう実際起こったことか・・・

ここは・・・異世界だ・・・)

木野は、図書館で歴史の本を読み、自分の世界とは、微妙に異なっている

そういうことが書いてある本があったのを見つけた

(何故ここに私は呼ばれたのか・・・！！)

ピーン！！

木野の頭の中に何かが通り抜けるような感覚が走った！

（この感覚・・・まさか！）

木野はすぐ図書館から出、バイクにまたがり、キーを指した

（まさか、奴らがいるのか？・・・・・・アンノウンが！）

「ジュエルシード、封印!!」

フェイトは、ある森の中でジュエルシードを見つけ、封印した

「これで6つめか・・・まだ足りない、これじゃお母さんは納得しない・・・」

「フェイト、そろそろ戻ろう」

ファイトの横には大型の狼がいた

「そうね、そろそろ戻りましょう、アルフ」

その狼の名はアルフというようだった

すると突然狼の姿から16歳あたりだろうか、そのくらいの少女がいた

だが二人が戻ろうとした瞬間

バッ

異形のモノが姿を現した

「!」

二人が振り向くと同時に異形のモノに二人は首を持ち上げられた

「あ・・・ぐ・・・！」

ミシ・・・ミシ

異形のモノは腕に力を入れ、二人の首の骨を折ろうとした

その異形のモノ・・・チーターのような姿をしていた

（だめ・・・もう意識が・・・）

フェイトがそう思った矢先！

ブルウーーン！

木野のバイクが異形のモノの顔に当たった

「！」

異形のモノは吹き飛ばされた

「う、ゲホッゲホッ」

フェイトは喉を押さえてうずくまる

「大丈夫か？」

「え？ 木野さん・・・」

バタッ

フェイトは目の前の男の名前を言い、気絶した

「・・・・・・・・」

異形のモノは、木野に向かい歩いて行き、殴ろうとした瞬間

バシッ

腕を受け止められた

「・・・・・・・・ふん！」

木野は異形のモノの顔に右ストレートをかます

バキッ

「！」

異形のモノはまた大きく吹き飛んだ

木野は腹部に両腕を交差し、叫んだ

「変身！！」

すると木野が光に包まれた・・・

一話 始まり(後書き)

次回予告

木野「シュウッ!!」

フェイト「貴方は？」

アルフ「あの化け物の正体はお前だな!!」

???「人は人であるべき、人でない者は消去します」

目覚めろ!! その魂!!

第二話

「変身!!」

木野の体が光に包まれた

だがその一部始終を見ていたものがいた

（グッ、あいつは、さっき倒れていた奴）

アルフは薄れゆく意識の中木野の変身をみていた

（ダメだ、・・・・もう・・・・意識が・・・・）

アルフは遂に意識を手放した・・・・

思わず異形のモノ・・・アンノウンは目を瞑った

そして光がなくなった所には、木野ではなく

異形のモノ・・・アナザーアギトがいた

「ア・・・ギ・・・ト」

そしてアンノウンはアナザーアギトに殴りかかる

シュッ

アナザーアギトは紙一重で避け、腹にカウンターをかます（左ジャブ）

「グッ、ガアアアア！！！！」

アンノウンは狂ったように叫び、アナザーアギトに攻撃をするが

全てカウンターを決められていた

シュッ

バキッ

シュッ

バキッ

の繰り返しだった

シュッ

ヒュッ

今度はアナザーアギトは、腰を低くして避け足払いを掛ける

ドゴッ

見事に命中し、アンノウンは倒れる

「グッ」

起き上がろうとした瞬間

アナザーアギトは、腹を思いっきり踏みつけた

ドゴッ

「ガッ」

アンノウンは苦しみの声を上げる

ドゴッ

ドゴッ

ドゴッ

アナザーアギトは何度も踏みつける

「グッ、ゲッ」

そして頭を持ち上げ右ストレートで殴り

吹き飛ばす

バギヤッ

キイーーーーン

バキッ

木にぶつかり木は折れた

するとアナザーアギトは右手を右腰におき

左手を右肩に付ける

右足を少し後ろに置き

左足を前にする

すると口のクラッシャーが開き

足元に緑色のアギトの模様が浮かび上がる

そしてそのエネルギーが右足に溜まり

アナザーアギトは、空高く飛ぶ

「シュウッ!!」

そしてアンノウンは起き上がる

だがその瞬間

アナザーアギトは、空から必殺技『アサルトキック』を繰り出す

「!!」

ドゴォッ!!!

アンノウンは胸部にまともに受け

大きく後ずさりする

するとアンノウンの頭に青い輪が浮かび上がる

「グッ、ガッ、グアアアアアアアア!!!!!!」

断末魔の悲鳴を上げ

そして・・・

ドガアアアアアアアアアア!!!!!!

爆発した・・・

木野は変身を解き、フエイトとアルフ（狼状態）をフエイトの部屋まで連れて行き

寝かせた

（さいわい命に別状はないか、よかった・・・しかし・・・）

木野は一つ疑問に残っていた事があった

（何故奴らが？・・・そして何故フェイトの事を？）

「う・・・」

考えている内にアルフが目を覚ました

アルフは寝かされているフェイトを見て叫んだ

「フェイトに何をした！！？」

「！！！！」

木野は大きく驚いた

いきなり起きたと思ったら叫んでしかも喋る狼なんて見たら

そりゃ誰だって驚くだろう

「もう一度聞く、フェイトに何をした！？」

「フェイト君には何もしてません、アンノウンに襲われた所を助け・・・！」

木野は口を摘むんだ、フェイトを助けたなどと言ってしまったからだ

「そ、その前に貴方は？」

「私はフェイトの使い魔、アルフだ！」

「使い魔？」

「ああそうさ、さあ今度はこっちから質問だ

あの化け物の正体は貴様だな！？」

「化け物？」

「とぼけるな！」

私は見た、あんたが化け物に変身するところを！」

「！？・・・・・・・・わかりました、話しましょう私の事を・・・・・・・・」

木野は回想を始めた・・・

「少し長くなるが良いか？」

「構わん」

すみません

省略します

「ふーん、つまりあんたは異世界者なんだね？」

「ええ、まあそういうことです」

まだ質問したいことがあります但今日はもう遅いので

明日あらためてお聞きします」

「ああ、わかったよ、部屋が一つあそこにあるだろ？」

そこで寝な、布団もそこにあるから」

「ありがとうございます、それでは」

「ああ、言っとくけどフエイトに手を出したら許さないからね!」

「ええ、肝に命じておきます、それではおやすみ」

「ああ、おやすみ」

第二話（後書き）

次回予告

木野「なんだこのレトルトばかりの冷蔵庫は」

フェイト「おいしい！」

なのは「まってください！」

目覚めろ！！ その魂！！

第三話（前書き）

感想ください

それとアクセスが2000を突破しました

ありがとうございます

第三話

木野は翌日の朝、目が覚めた

（今の時間は・・・6時 48分・・・少し遅かったかな？）

木野は台所にいった

（2人はまだ寝ているみたいだな、朝食を作るか・・・）

ガチャ

木野は冷蔵庫を開けただが・・・

「なんだこのレトルトばかりの冷蔵庫は!？」

中にはレトルトが・・・レトルトしか入っていなかった

（これはちよつと栄養が偏るな・・・買い出しに行こう）

木野は時計を見た

7時 02分だった

（24時間営業の所に行くか・・・）

カチャ

ブルンブルウーン

木野はバイクのエンジンを吹かした

ブウウーン

そしてスーパーにいった

(とりあえずこんな感じでいいだろう)

木野はスーパーに行きいろいろ買った

（時間は・・・7時　24分・・・そろそろ二人も起きるところだな

さてこの世界のお金は私の世界と会うか

心配は・・・ないようですね）

木野はもう一人の男性のお金を見たが同じだった

（さてそろそろもどるか）

木野はバイクに跨り帰った

（時間は7時 46分か・・・二人とも起きてるかな？）

部屋に戻ったが二人ともまだ起きてなかった

（まだですか・・・仕方ない簡単な物を作るか・・・）

そして木野は料理を始めた・・・

（ん？ この匂い・・・台所か、時間は・・・7時 50分寝すぎたか？）

アルフは目を覚まし、台所へいった

「ん？ おい、木野！」

「ん？ 起きましたか、朝食の準備中なのでちょっと待っててください」

「それよりもレトルトがあるだろ」

「あのままだと栄養が偏ります」

「むう・・・」

「それとお願いがあるのですが」

「なんだい？」

「私の正体、フェイト君には秘密にしておいてください」

「なぜだい？」

「彼女には、私の正体を知ってもらいたくないのです・

あの醜い姿を・・・」

「！ ああ、わかったよ」

「朝食の準備も整ったので彼女を呼んできてください」

「OK！」（グッ）

「ほらフェイトおきな！ 朝だよ」

「むぐ、ん？ あれ？ ここは？」

「ここはあんたの部屋だよ、ほら朝食の準備が整ったから台所に行きな」

「朝食の準備？ 誰が？」

「いってみればわかるよ」

「木野さん!？」

「あ、起きたね、さ、椅子に座って」

「あの「聞きたい事は食べながら言います」は、はい」

ガタン

「い、いただきます」

献立は白米、豆腐とほうれん草のみそ汁、おかずはアジの開きだった

「パクッ」

「どうだ？」

「・・・」(ワナワナ)

「?」

「おいしい!」

フェイトは満足な笑顔を作った

「そうか・・・それは良かった」(フウ、料理にあまり自信がなかったからよかった)

パクパク

「さてそれでは私がここにいる理由だが・・・」

「・・・あの怪物は？」

「ああ、なんとか貴方をバイクに乗せて振り切ったよ」

「そうですか」

「あとここに入れたのは鍵を借りたからだ」

ヒラヒラ

木野はフェイトに鍵をみせる

「あ、それ！」

「返すよ、はい」

「あ、どうも」

「・・・」

「あの、どうして私があの場所にいたと・・・？」

「！・・・偶然通りかかったただだよ」

「そうですか・・・ん？」

「どうした？」

「ちょっと眠くなったので・・・」

「そうか、じゃあ食べたら寝てていいよ」

「あ、でも「まだ貴方は、寝てた方がいい、私は元医者だ、わかる」は、はあ

「じゃあわかりました」

パクパク

「ごちそうさま、おいしかったです」

「歯磨きはちゃんとしておくように」

「はい」

タッタッタッ

フェイトは駆けていった

「・・・さてアルフさん、話していいですよ」

「ああ」

「さて、昨日の続きです、使い魔とはどういう意味です？

そして何故あの場所に？」

「・・・少し長くなるけどいいかい？」

「かまいません」

すみません

また省略します

「魔法・・・ジュエルシード・・・そして使い魔・・・信じられませんが

納得するしかないでしょうね」

「話がわかってよかったよ」

「・・・何故でしょうか？」

「ん？」

「何故フェイト君のお母さん・・・プレシアさんは自分から行かないのでしょうか？」

「・・・それに関しては私も疑問に思った」

「それに・・・その話からするとプレシアさんはジュエルシードを使って

何をしようとしてるのか・・・まあいいでしょう」

「ん？」

「私もジュエルシード集めに協力します」

「え？　でも」

「深夜ならばいいはずですが、その時間帯ならフェイト君も寝ている

でしょう」

「なるほど、わかった、協力ありがとう」

言っとくけど盗むんじゃないよ」

「心配ありません、さて」

「どこ行くんだい？」

「いえ、ちょっと買い出しに」

「へ？」

「いや、昼食用の物買ってくるんですよ」

「ああ、わかった、フェイトに言っとくよ」

「はい、あと、しばらく同僚していいでしょうか？」

「構わないさ、フェイトもあんたと一緒にいたいみたいだから」

「？ 何故？」

「さあね、あんたを父親と見てるんじゃないか？」

「そうですか・・・では」

「ああいつてらっしゃい」

木野は一人公園にいた

（さてと・・・）

実は木野は嘘を付き、単独でジュエルシードを探していた

（さてどう探すか）

コッソ

足元に何かが当たった

(ん?)

木野はそれを拾い上げたそれは・・・

(ジュエルシード!?・・・さっそく見つけたか)

木野は持ち帰ろうとしたが

「まってください」

一人の少女が現れた

「ん? 君は?」

「それを渡してください!」

これが木野となのはの、最初の出会いであつた・・・

第三話（後書き）

次回予告

木野（彼女の前で変身するわけにはいかない）

フェイト「温泉に行きましょう」

アンノウン「ガアアア!!」

目覚めろ!! その魂!!

第四話

「待ってください！」

「・・・何か用ですか？」

（アルフさんがいていたもう一人の子ってこの少女か・・・）

前は省略しましたが

アルフはなのはの事も一緒に伝えていたのだ

「そのジュエルシードを渡してください」

・・・どうやって撒くか）

「ジュエルシード？・・・これの事ですか？」

木野はジュエルシードを取り出す

「それです！ それを渡してください」

「・・・どうしてですか？」

「それは危険な物なんです！」

「危険？ どこがですか？」

「そ、それは・・・」

「・・・ちよつとの間眠ってもらいます」

「え？　グッ！」

ドゴッ

バシッ

木野はなのはの腹部にパンチを入れて

首に手刀を入れる

「すまんね」

木野は手袋を装着しバイクに鍵を差し込んだ

カチッ

ブルルウン

（彼女の前で変身するわけにはいかないのですね

手荒いマネだが許してくれ

さてアルフさんにジュエルシードを渡しますか・・・）

「温泉に行きましょう」

戻った途端フェイトにこう言われた

「えーっと・・・いつですか？」

「来週の土曜日です」

「何故いきなり？」

「ええっとくじ引きであたって・・・」

「・・・まあいいでしょう」

「やった！」

フェイトの顔は笑顔だった

（木野さんと一緒にいられる・・・）

心の中でそうフェイトは呟いた

「時間は・・・午後　11時か・・・」

「どうしました？」

「いえ、もうすぐ12時だから昼食の準備を・・・」

「あの、手伝っていいですか？」

「ん？　構わないよ」

「やった！　何を作るんです？」

「野菜炒め、みそ汁は朝に残ったのがあるしね」

「なら私ニンジンの皮むきを手伝います！」

「うんじゃあ頼んだよ」

「はい！」

（温かい、家庭だねえ）

アルフは心の中でそう呟いた

確かにこれを第三者が見れば親子と間違えそうだった

「いたっ！」

どうやら包丁で指を切ってしまったようだ

「どれ見せ見て・・・よし、これで大丈夫と」

木野は消毒液を付けて絆創膏を貼った

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして・・・できたよ」

「わあ！」

できた野菜炒めはピーマン、キャベツその他もろもろといった物だった

「いただきます」

因みにアルフはドッグフードを食べている

「「ごちそうさまでした」」

「さてと、フェイト君ちよっとお使いにいつてくれないか？」

「はい、なんでしょう？」

「これに書かれている物を買ってきてほしいんだ」

「わかった、いつてきまあす」

「気を付けるんだぞ」

「はあい」

ガチャツ

キイイイ

「・・・さてアルフ君」

「・・・なんだい？」

「これを・・・」

「!・・・ジュエルシード・・・どこで？」

「さっき通りかかった公園で見つけました」

「そうかい、ありがとう」

「それと・・・」

「？」

「もう一人の子に会いました」

「!・・・どんな子だった？」

「なんというか・・・目は優しかったです」

肩にフェレットがいました

多分使い魔でしょう」

「なるほどね、さてこれで8つ目か」

「あの、私には魔法が使えますか？」

「・・・できるみたいだね、魔力も感じるし・・・」

「じゃあ私に魔法を教えてくださいませんか」

「いいけど転移魔法と念話とバインドくらいだけだよ」

「？何故それだけですか？」

「攻撃魔法は変身すれば十分じゃないのかい？」

「・・・それもそうですね」

「じゃ、まずは念話からだよ」

「はい」

(聞こえるかい?)

(ええ、聞こえます)

(よし、これで何時どこにいても連絡が取れるね)

(ええ・・・フェイト君が帰ってきたようです)

「ただいまー」

「おかえりー」

「あれ？ どこいくんです？」

「いえ、おやつに何か買ってこようと思ひまして」

「そうですか、いってらっしゃい」

「ええ、いってきます」

カチャ

ブウウン

（さて、なにをかうか・・・ん？）

木野はある店の品に目を止めた

（・・・シュークリーム・・・ちょうどいいこれにしましょう）

木野は近くの駐車場にバイクを止めた

「シュークリームを8つほどください」

「かしこまりました・・・どうぞ」

「お代はこれで」

「ありがとうございます」

（さて・・・！・・・この気配）

ブルルウン

木野は、ある人目のつかない所に来た

「いるんだろ、出てこい！」

ザッ

木野が叫ぶと同時にナニかが現れた

「やはり・・・アンノウン」

「ガアアア！！」

アンノウンはいきなり飛びかかってきた

ヒュッ

だが木野は見た

アンノウンの腕にジュエルシールドが埋め込まれているのを

（！あれは！

アルフ君！）

木野はアルフに念話をした

（なんだい？ 木野）

（ジュエルシールドを見つけただが前に貴方を襲った

怪物に似た奴の腕に埋め込まれている！）

（何だって！？　すぐそちにいく！）

（ええ、とりあえず変身して時間稼ぎします）

（くれぐれもあんたの必殺技を出すなよ、あの威力・・・

ジュエルシールドを壊しかねない）

（わかりました）

「変身！！」

「グルルルル」

木野は変身してアンノウンに向かった

「シュウッ！」

木野はアンノウンに向かっていった

数十分後

（確かこのあたりに・・・いた！）

アルフはフェイトが寝ているのを見計らって出て行った
だがアルフが見たのは

（怪物をボコボコにした木野・・・）

そう木野はアンノウンをこれ以上ないくらい骨を折り
動けなくしていた

「木野！」

「ああアル・・・その姿は？」

「ああ、私人の姿にもなれるんだ」

「ほおー、さてジュエルシードを封印してください」

ズボッ

木野はアンノウンからジュエルシードを引き抜いた

ポタポタ

アンノウンの血が付いていた

「エグッ、・・・・ジュエルシード封印！」

「さて戻りましょう」

木野はアンノウンを無理やり立たせて

腹部に必殺技『アサルトキック』を繰り出し

倒した

第四話（後書き）

次回予告

アルフ「木野に私達の正体を教えようと思ったんだ」

木野「温泉到着！」

フェイト「ま、魔法が効かない！！！」

目覚めろ！！ その魂！！

第五話（前書き）

アクセス4000突破

ユニーク1000人突破しました

それと前回の次回予告を変えました

第五話

温泉の日の行く前

「木野に私達の正体を話そうと思うんだ」

アルフが私にそう言ってきた

「・・・いきなり何を言い出すのアルフ？」

「いやね、これまで私達だけで

住んでたわけじゃない？

なら木野に話さないとき・・・

気持ちに変な感じがするんだよ

だから教えた方がいいんじゃないかって」

「・・・そうね

木野さんが帰ってきた後に言いましょう」

「わかった」

ギチャッ

「ギチャッ？」

すみません間違えました

「しっかりしてよね、ナレーターさん」

はい

ガチャッ

「お帰り、木野」

「どうした？」

神妙な顔して」

「実は木野さんに話さないといけない事があるんです」

「話さないといけないこと？」

「あの、実は」

少女説明中

「魔法、ジュエルシード、どれも信じられませんね」

「証拠もあります」

「何です？」

「アルフ」

「あいよ」

「！」

アルフの姿が人変わる

「なるほど、信じるしかないようですね」

「良かった」

「さて、話は置いておいて、準備は整いました？」

「うん整ったよ」

「さて、じゃあいけますか」

ブルンブルウーーン

荷物を乗せた木野のバイクがエンジンを吹かた

「行きますよ、ちゃんとつかまってくてください」

ヘルメットが一人分しかないため

仕方なく三人ともヘルメットをかぶってない

木野がかぶらないのは気分だからである

ブウウーーーン

木野のバイクが走ってゆく

「温泉到着！」

「なんだかんだあって着きましたね」

「なんだかんだって何だい？」

「・・・まさか忘れたのですか？」

「バイクでの出来事を！！」

バイクでの出来事

「風が気持ちいいですね」

「ええ、ヘルメット無しでもいいものだ・・・」

「よいしょっと」

「ちょっ、何を・・・アルフ・・・」

「ヒーハー!!」

「アルフが狂った・・・」

「叫びたくなって」

「ちょ、バランスが、ちゃんと座れー!!」

木野の怒声が響いた

「テヘツ☆」

「テヘツ☆じゃないわよ全く」

「さて、入りましょうか」

ビカー！！

「あれは・・・」

「ジュエルシールドだな」

「いきましょアルフ」

「私も同行してよろしいだろうか？」

「いいですけど危ないですよ？」

「構いません」

「じゃあ行きましょ」

「おう！」

「ジュエルシード封印！」

「省略したねえ、作者も」

「メタ発言に気を付けていただきたい」

木野はジュエルシードが変身した怪物とフェイト達の戦いを

見た

「なるほどこれがジュエルシード・・・」

木野はジュエルシードを手を取った

「さて旅館に戻りましょう」

ヒュッ

「！」

突然木野達の前にアンノウンがあらわれた

カメレオンのようなアンノウンだった

「チッ嫌な奴に会っちゃったね」

「あいつは・・・木野さん！」

アンノウンは木野に向かい走って行った

「うわっと」

木野は華麗に避けた・・・だが

「うおっ！」

舌を伸ばしてきた・・・ビョーンと

ピシッ

木野の腕をはたいた

思わず木野はジュエルシールドを手放してしまう

アンノウンはそれをすぐにとった

そして・・・

「ギシャアアアア！」

アンノウンは雄たけびを上げた

「くっ」

フェイトは魔法で攻撃を仕掛けるが・・・

「魔法が・・・効かない!？」

そう、多少はひるむが全く効いている様子がなかった

アンノウンが攻撃を仕掛けた時フェイトは思った

(やられる!)

と・・・だが

ドゴォッ

ビシビシ、バキィ

木野のキックがアンノウンの攻撃を防いだ

「え？」

「すみませんね」

バシッ

木野はフェイトの首に手刀を入れる

「フェイト君を巻き込むわけにはいかないですよ

第五話（後書き）

次回予告

木野「変身！」

フェイト「あれ？ 何があったの？」

アルフ「あいつ・・・倒したはずなのに！」

目覚めろ！！ その魂！！

第6話（前書き）

アクセスが5000突破・・・マジで!?

そしてまた前回の次回予告変更

第6話

「変身!!」

木野は変身し、アナザーアギトになる

「フェイト君の事頼みましたよ」

「わかったよ」

「シュウツ!!」

木野はアンノウンに向かって攻撃を仕掛けるが・・・

ビョーン

舌を伸ばしてきた

「ヌウツ!?!」

何とか避けるがアンノウンは何度も伸ばしてくる

このままではラチがあかないと感じ

木野は両腕を交差する

「グウツ」

シャキーン

すると両腕両足から爪がのびる

ビヨーン

アンノウンはまた舌を伸ばしてくるが木野は避け

右腕の爪・・・バイオクロウで切り裂く

ズバツ

ブシュウウウ

切った舌からは血で噴き出す

「ギャアアア！」

アンノウンは舌を支えるだがそのすきを木野は見逃さなかった

ブス

木野はバイオクロウで腹部を刺し貫通させた

「ギャアアアア！」

その爪から逃れようとするが

「ヌウン」

木野はアンノウンを持ち上げ空高く投げた

バッ

そしてアンノウンの背中に向かい

踵のバイオクロウを突き出す

まるでギルスの必殺技のギルスヒールクロウの様だがアナザーアギトが使った為

さしずめ『アナザーヒールクロウ』というものだろう

そして木野は踵を抜き一回転して着地した

アンノウンはその攻撃を受けて何故か

ドロドロと溶けた

木野は不審に思ったが変身を解きアルフの所に戻った

だが木野は気づいていない、ジュエルシードが

奪われたままということに・・・

木野とアルフは旅館にフェイトを運び寝かせた

「さて、フェイト君には悪いですが先に温泉に入りましょう」

「そだな、置き手紙置いておこ・・・さて、行こうか」

「ええ」

木野達は浴衣を着た（フェイトはアルフが着せた）

バサッ

「あれ？ 何があつたの？」

フェイトは木野達が去った後すぐ起きた

「ん？」

フェイトはすぐ置き手紙に気付いた

「・・・ここは旅館か・・・って木野さん達追いかけないと！」

フェイトはすぐ部屋から出た

「ん？ あれは・・・」

「どうしたんだい？」

「あれですよ、あの人」

木野は指をさす、そこにはなのは達がいた

「あー、あれがフェイトを邪魔する奴かい？」

「ええ」

「・・・（ニヤリ）」

「何かよからぬことを考えてますね」

「ちょっと脅してくる」

「ほどほどにしてくださいよ」

数分後

「アルフ君、いつまで待たせるんですか？」

「あつ、ごめーん、じゃあね、おチビちゃん」

「あ、あの人！」

「さあ行きますよ」

木野達は去って行った

木野達は途中フェイトに出会い、風呂場の前まできていた・・・だが

「男湯、女湯・・・そして・・・」

「混浴・・・」

「どうします?」

「え!?! どうしますって・・・」

「さあ二人とも・・・混浴ヘレッツゴー!」

「え！？　ちょ、アルフ！」

「やれたれ、ま、先はなんとなく読めてましたけどね」

アルフはフェイトを引っ張っていった

「いやあー、極楽極楽」

／／／

（フェイト君が赤くなっている・・・やはり

私が一緒にいるからだろうか？）

ピヨコン

「アルフ、耳」

「あつとごめんよ」

「さて、私はサウナにいったから戻ります」

「じゃあ私達はもうちょっと入ってから出るわ」

「うん、そうする」

「では・・・」

ザパアッ

「
／
／
／
」

フェイトはもっと顔を赤らめた

出た後のフェイトは真っ赤に出来上がっていた

「のぼせるまでどうして入っていたのですか？」

「いえ、ちょっふお」

（そうとう出来上がっているな・・・少し寝かせよう）

「フェイト君まだ少し夕飯まで時間がある、少し横になってください」

「え？ どうして・・・？」

「ちょっとだけマッサージを・・・」

「！ いいです！」

何故かそのことを言った途端フェイトが慌てて否定した

「でも・・・「いいです！」・・・わかりました」

（何故あそこまで否定する？

私に触れられる事が嫌なのでしょうか）

（フェイト・・・見られたくないんだね・・・背中・・・）

「じゃあちよつと魔法を教えてください、攻撃魔法以外の」

「わかりました！」

6時 36分

木野達は部屋に戻っていた

木野はバインドと転移魔法を覚えた！

「ドラクエですか・・・」

「食事の用意ができました」

「はい、今行きます」

ガラッ

襖をあけ、コタツに行く

「どうぞ召し上がってください」

「しゃぶしゃぶか・・・」

「しゃぶしゃぶって何ですか？」

「まあ私の食べ方をマネてください

それとアルフ君・・・人の姿の状態で

ドッグフードを食べないでいただきたい」

「ん？（モグモグ） どうしてだい？」

「ちょっと・・・見てて悲しい・・・こっちで一緒に

食べましょう」

「ん？ わかった」

「あー、以外とおいしかった

人間の食べ物も捨てたもんじゃないね」

「ごちそうさま」

「さて、そろそろ寝ましょう」

「ええ、そうです・・・」

フェイトの言葉は途切れた

なぜなら遠くの森が光っていたからだ

「ジュエルシード！」

「・・・あれ？　ない・・・」

「なんだい？」

「どうやらあれは私が取り忘れた物ですね」

「取り忘れ？　・・・あー！」

「そうですアンノウンに襲われた時の・・・」

「なるほどね・・・行こうフェイト」

「うん」

3人は持ってきた着替えを着た

「さて、いきましよう」

森の中で見たもの、それはさっき倒したはずのアンノウンだった

「あいつ・・・倒したはずなのに！」

何故アンノウンがまだ生きているのか？

続きは次回へ・・・

第6話（後書き）

今回から次回予告無しです

まあたまにやりますけど
WWW

第7話（前書き）

フェイトさんは現在、7つジュエルシードを持っています

第7話

「なんなの？ あれ！？」

さっきも出てたけど」

いきなり現れたアンノウンに、フェイトは驚き、混乱する

「アンノウン・・・」

「え？」

アルフの呟きにフェイトは、疑問に思う

「アンノウン？」

「・・・、フェイト君、下がっててください」

木野がフェイトに、下がるよう命じる

「え？、でも」

「下がっててください！！」

「（ゾク） わ、わかりました」

フェイトは、背筋が凍るような感覚がした

「え？、変身はしないのか？」

「さすがに、気絶させるのは、もう少し、嫌になってきまして」

「つまり、面倒くさくなったと?」

「簡単に言うと、そうです」

「でも変身してなくて、勝てるのか?」

「勝てはしませんが、撃退ならできます」

「どうやって?」

「こうやって」

木野は手をアンノウンの方にかざし、目を瞑る

するとアンノウンが、もだえ苦しむ

「グ、ガァァァ!」

「な、何が起こってるんだい?」

「アギトの状態だと使えませんが、人間の姿のままだと、

よく言う念力みたいなものです」

「ガァァァ!」

解説してて念力が解けたのか、アンノウンはフェイトに、急接近した

「しまった!、フェイト君!」

「え!?!、きゃああ!」

フェイトは、何とかバルディッシュを起動させて、アンノウンの攻撃を防ぐが、

「え!?!、嘘!」

何故か、アンノウンの攻撃した腕には、三つのジュエルシードがあった

「く、このお!!」

フェイトは、何とか立ち上がって攻撃する

「ぎゃ!?!」

予想外だったのか、アンノウンはジュエルシードを一つ手放してしまいう

「グ、ウウウウ」

アンノウンは姿を消して、どこかへ行ってしまった

「大丈夫ですか!?!、フェイト君!」

「大丈夫かいフェイト?」

「うん、大丈夫、でもジュエルシードが・・・」

「大丈夫だよフェイト！、次会ったとき、取り返せばいいさ」

「そ、そうだよね・・・」

「どうしましたか、フェイト君、浮かない顔して」

「いえ、その・・・」

「ん？」

アルフは何か気配がして、その方向を見る

「あーら、あら、あら、あら」

アルフの声につられ、二人もその方向を見る

「おや？、貴方がたは」

「あっ！」

木野の姿を見て、なのはは、驚く

「フッフ、子供は良い子でって、言わなかったっけ？」

「それを、ジュエルシードをどうする気だ！？」

それは、危険な物なんだ！」

なのはの肩にいるフレットが、叫んだ

「さあね？、答える理由が、見当たらないよ

それにさあ、あたし親切に言ったよね？

良い子でないと、ガブツと行くよって」

「アルフ君、まだ子供だから、そんな事言うもんじゃない」

「あたしらの邪魔する奴なんだから、それくらい言ってもいいじゃない？」

「まあ、そうですね」

「ッ！」

なのはは、身構えると同時に、アルフも狼の姿になる

「木野、フェイトを連れてバイクの準備しといて」

「わかりました、っと」

「待って！」

なのはが、飛びかかってくる

「フウ、やれやれ、フェイト君、キーを渡しますので差してきてください」

「わかりました」

「さて、貴方の相手は、私がしましょう」

なのはがレイジングハートで攻撃するが、木野は左手で受け止める

「え!？」

そして、木野は右手で殴ろうとする

「グッ！」

殴られる、となのはが思ったが痛みを感じない

不思議に思って目を開けるが、右手はなのはの、目と鼻の先で止まっていた

「え!？ レイジングハート!？」

なのはがそう言うと、レイジングハートは、ジュエルシードを出していた

それを、木野は取る

「賢い相棒がいて、良かったね」

木野は、コートからサングラスを取り出し、かける

「それでは、アルフ君、帰りましょう」

「Ok！」

アルフは、人の姿に戻り、木野の居場所へ行く

「じゃあね、おチビちゃん達」

「それでは」

アルフと木野はそういうと去って行った

なのは達は呆然と、その後ろ姿を、見ていた……

番外編みたいなもの（前書き）

木野さんをロリコンと思っている人がいるようですが

木野さんはロリコンじゃない！

少なくともこの小説では！

あと、今回は物語が進みません

番外編みたいなもの

木野達は、デパートに戻っていた

「さて、話しましょうか、私の事、あの怪物の事」

「ええ、お願いします」

木野は、バイクで戻る途中、あの超能力について聞かれた

帰ったら話すと木野が言い、今が話す瞬間だ

「このくらいですかかね」

「なんか、凄いですね、光と闇とか」

「ま、今日はこんくらいにして寝ようかフェイト」

「うん、そうだね」

「では、私も寝ますか」

「ええ、では」

「その前に少しいいですか？」

「何でしょう？」

「背中を見せてくれますか？」

「え？、でも」

「少しだけでいいんです、見せてくれますか？」

「・・・わかりました、アルフ」

「いいのかい？、フェイト」

「いいよ」

アルフは、フェイトの背中の裾をまくりあげる

その背中には、無数の傷跡があった

「!、やはり・・・、これは鞭の傷跡？」

フェイト君、これは誰から？」

「・・・、お母さんから・・・」

「!、そうですか、少し横になっていてください」

「?、わかりました」

そうしてフェイトは、横になる

「このままでは、いずれ取り返しのない事になる、少し治療しますね」

「わ、わかりました」

木野は、持ち前の医療技術で、治療していった

「これでよし」

「ありがとうございます」

フェイトの体には、包帯が巻かれていた

「さて、11時 23分、もうねましようか」

「はい！」

こうして、今回の一日が過ぎた

番外編みたいなもの（後書き）

久しぶりの次回予告

木野「フェイト君のお母さんについて教えてください」

なのは「あ、貴方は・・・」

アルフ「フェイト！、答えなくていい！」

目覚めろ！！ その魂！！

第八話（前書き）

もう一度言います

木野さんはロリコンじゃない！

それと今回、時間が飛んだりします

第八話

翌日

午前11時37分

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「はい、なんですか？」

木野の呼びとめられ振り返るフェイト

「フェイト君のお母さんについて教えてください」

「………」

沈黙……、それがこの空間に漂うものだった

「いえ、無理に話さなくてもいいです」

「……」

フェイトの顔は、何か悲しいような雰囲気、あった

（会った時も目が何処か悲しそうな感じがしてたな）

木野は、心の中でそう、呟いた

じつは木野は、フェイトと初めて会った時から気付いていたのだ

どこか悲しい感じがすると・・・

「まあまあ二人とも、そろそろお昼ご飯だからさ！」

その沈黙を破ったのは、横から見てたアルフだった

「ええ、そうでしょうか

それとアルフ君・・・、後ろの持っているものを出してください」

「ギクッ！、な、なんの事かなあ？

私何も持っていない「いいから早く！」・・・、」

バサッとアルフの手が出る

持っていたのは、ドッグフードだった

「えへへ・・・」

「ハア、全く」

そう言って、木野はドッグフードを取る

「食べるならこのぐらい」

っと、お椀を手を持ち、ドッグフードを入れる

それは、一分位で数え切れるくらいの少量だった

「ええー！、こんだけ！？」

露骨に嫌な顔をしながら、露骨に嫌な声で反論する

「これだけです、全く、食べられるだけマシと思いなさい」

「ブーツ、ブーツ！」

アルフからの、ブーイングの嵐

「フウ、さてと」

木野は、無視して昼食の準備に取り掛かった

「」「ごちそうさま」と」「」

なんと息ピツタシなのだろうか

「ちょっと出かけてきますね」

「あ、はい」

「いってらー」

「ちょっと遅くなるかもしれませんが」

冷凍庫にレトルトが入っているので6時までに帰ってこなかったら

食べててください」

「ほーい」

アルフの言葉と共に木野は、外に出る

午後6時57分

木野はバイクを走らせていた

（ん？ あの子は・・・）

木野は、道端を歩いているなのはを見つけた

すぐ近くの駐車場にバイクを置き

その子に向かって言った

「ねえ君！」

木野が、そう叫ぶとなのはは、木野の方に向いた

「あ、貴方は！」

「立ち話も何ですから、少し移動しましょう」

木野は駐車場に向かった

なのはも、黙って睨みながらついてゆく

「少し待っててください」

そういい、バイクに腰かせ、木野は、自動販売機に行く

ガコンと音がし、ピロピロリンという音がなった・・・、当たったようだ

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

木野はなのはにレモネード（あったかい）を渡す

因みに木野は、b o s○缶コーヒー（ブラック&あったかい）×3本だった

カチツと音がなり木野がゴクゴクと飲んでゆく

「フウ」

「・・・」

なのはも黙って開け、飲む

「所で、お名前は？」

「・・・高町　なのはって言います」

「なのは君ですね、私は木野　薫と言います」

「・・・あの」

「なんです？」

「何故貴方は、あの子と一緒にいたんですか？」

「ああ、ちょっとね、同居してるんですよ」

そういうとなのはは、木野を妙な目でみる

「勘違いしてるようですが、私はロリコンではありませんよ」

木野がそういうと、なのはは、どこかホッとした顔になった

カチッと、木野が二本目を飲む

「・・・、所で」

「なんです？」

今度は、木野が質問する

「その肩に乗っているフェレットは使い魔ですか？」

「い、いえ、ユーノ君は、友達です」

と、なのはが、戸惑いながら言う

「そうですか、少しお話させてもよろしいでしょうか？」

「え、ええ、どうぞ」

するとフェレットが木野の近くの寄る

「君、名前は？」

と、木野が質問する

「ユーノ・スクライアと言います」

フェレット——ユーノがそう言う

「ユーノ君ですね、わかりました」

「あの、どうして貴方達はジュエルシードを集めてるんですか？」

「まあ、私からの理由というと、見捨てられないからですかね」

「見捨てられない？」

「ええ、何故か判りませんがね、それと、後二人の理由については、自分から聞いてください」

まあ、言うつもりないでしょうけどね」

「わかりました」

カチッと、3本目のコーヒーを飲む木野

「・・・、それでは私はもう行きますね」

「あ、はい、それでは」

革手袋とヘルメットを身につけ、バイクに木野は跨った

「それでは」

木野がバイクを走らせると、街全体が結界で覆われる

（ジュエルシードが発動したか

・・・今回は見守るとしましょうか）

木野はバイクの速度を上げる

（フェイト君達は・・・、いた）

木野は走りながらフェイト達を探していた

（どうやら話し合ってるようですね）

するとアルフから大きな声が出る

「フェイト！、答えなくていい！」

その言葉を聞いてアルフの方に向く

「優しくしてくれる人の元で、

ぬくぬく甘ったれた生活をしているがきんちよ何かに教えなくていい！」

その言葉になのはは、驚く

「え……?」

「私達の最優先事項はジュエルシードを集める事だよ!」

そしてフェイトはジュエルシードに向かってゆく

なのはもそのすぐ後に続く

ガシィツと音がする、するとピシピシピシッと

二人のデバイスにヒビが出来る

第八話（後書き）

うーむ、中途半端だ、まあいいか（おい

第9話（前書き）

この無印編の時系列は、9月から10月です

第9話

デバイスにヒビが、入り、光が結界全てを覆う

二人は弾き飛ばされる

そしてフェイトは、ボロボロになったバルディッシュを見る

「大丈夫？、戻って、バルディッシュ」

『yes, sir』

バルディッシュがそう答え、姿を変え、フェイトの手袋の甲にはまる

因みに、まだ結構高い空中に浮いている、そのため

「ッ！」

落下する

フェイトは、落ちる寸前目を瞑るが

「大丈夫ですか？」

木野がフェイトを抱えていた（お姫様だっこ）

「あ、ありがとうございます」

フェイトは、礼を言って降りる

だが、ジュエルシードが輝き始める

「!」

フェイトが、驚異的な早さで近づき、両手で持つ

その瞬間、ジュエルシードが、より一層光を強める

「フェイト!」

アルフが叫ぶ

「ウツ、グツ」

「フェイト!、駄目だ、危ない!!」

アルフの言葉に耳を貸さず、そのままギュツと握る

そしてフェイトは、膝をつく

すると、そこに魔法陣が浮かび上がる

「止まれ、・・・止まれ!、止まれ!」

光がまた強くなる

フェイトの手袋が破け始める

このままでは、本当に危険だと分かった木野は、フェイトを突き飛

ばす

「え？」

飛ばされたフェイトは、木野を見る

「ヌツ、グッオオオオ！！！」

今度は、木野がジュエルシードを掴む

しかも片手で

木野の声に驚くが、また驚く事が起きた

木野の足元に、アギトの模様が出てきたのだ

「グッ、とおまあれええええ！！！！！」

木野の叫びと共にアギトの模様が浮かび上がり

ジュエルシードを包む

「グッ、ハアハア、フウ」

封印できたのか、光が消える

「止まった・・・」（バタッ）

安心したのか、フェイトは気絶する

「フェイト！」

アルフが人の姿になりフェイトを抱える

アルフは木野の事を一瞬見たが、なのはの方を睨んだ

「あっ」

なのはは、一瞬戸惑うが、ユーノは睨み返した

そしてなのはから視点を変え、フェイトを心配そうに見、飛び上がる

木野もそれに続き、アルフを追う

なのはは、それ見る否、それを見ていることしか出来なかった

部屋に戻ったアルフと木野は、フェイトの手を治療していた

シユルシユルとアルフがフェイトの手に包帯を巻く

「ングッ！」

フェイトが呻く

「ご、ごめんよ、フェイト、ちょっと我慢して・・・」

「平気だよ、・・・ありがとう、アルフ、後木野さん」

「なんです？」

「ありがとうございます、あのままだと私の手、もっと酷かったですから」

「ああ、私からも礼を言うよ、ありがとう」

「いえ、こんな私に出来ることは、これくらいですから」

二人（二人と一匹？）に礼を言われ、そう返事する木野

「明日、お母さんに会いに行くんですけど、一緒に行きますか？」

「ええ、ご同行しましょう」

「・・・さてつと、明日の為にそろそろ寝ようよ、二人とも！」

「はい、ではおやすみなさい木野さん」

「ええ、ではおやすみ」

自分の部屋に入ってゆく木野

「さてと、お土産はこれで良しと」

フェイトとアルフと木野は、マンションの屋上にいた

「甘いお菓子か・・・」

フェイトの持つお土産のケーキを手につつアルフ

「こんなので、あの人・・・、喜ぶのかねえ？」

「わかんないけど、こういうのは、気持ちだから」

「フウウン」

と、アルフは言う

「さて、そろそろ行きましようか」

因みに木野はサングラスをかけている

「はい、・・・時限転移、時限座標、876C、4419、331
2、D699

3583、A4160、779、F3125」

そう言うと同時に、木野達の足元に魔法陣が出来る

「開け、誘いの扉、時の庭園、テストロッサの主のもとへ！」

言い終わると同時に木野達は光に包まれる

「・・・」

フェイトに無言でついて行く木野

歩いて行くと大きな扉の前に出る

木野はその扉を見上げる

ギィィィと扉が開く

その奥には、大人の女性がいた

「来たのね、フェイト・・・そこにいる男は誰？」

「どうも、私はちょっとした事情で同居している、木野 薫と申します」

「木野・・・薫・・・とりあえず、フェイトと二人きりにしてもらえる？」

話があるから」

「・・・わかりました」

木野はそういって出て行った

見えないサングラスの瞳でプレシアを睨みながら・・・

木野とアルフが、扉の外に出ると、扉は勝手に閉じた

「・・・」

アルフは、険しい顔をしていた

（ジュエルシードの数は6つ、これだけじゃあ、フェイトは・・・！）

「どうしたのですか？」

「そ、それが・・・！」

ビシッという音と共にフェイトの悲鳴がアルフに聞こえる

その音に木野も気付いたのか扉に向かって走る

木野は開けようとするが全く開かない

このままでは駄目だと木野は思い、腕を振りかぶる

「ヌウン！！」

木野がそう言うと同時に、木野は扉に全力のパンチをする

ビシピシピシッという音と共に扉は碎ける

そこにいたのは、チェーンバインドで縛られたボロボロの気絶したフェイトと

鞭を持ったプレシアだった

「何をしているのですか？」

「見てわからない？、お仕置きよ、まあ前よりは多めに持ってきたから

鞭打ち290回にしてあげてるから」

「……、ジュエルシードは、どれだけ危ないかは知っていますよね？」

「ええ、もちろんよ」

「そんな物を子に集めさせて、その上少ないからお仕置きですか？」

「ええ、そうよ」

「!!!!、そうですか」

木野の体は震えていた、その震える腕で、木野はサングラスを取る

その震えは、

恐怖の震えではない

その震えは、

歓喜の震えではない

その震えは————怒りの震えだった

サングラスを取った木野はそのサングラスを握りつぶす

「あなたは、フェイト君の母親なのですよね？」

「そうよ、何か？」

「娘にそんなことをしても何も思わないのですか？」

「別に」

この言葉と同時に木野の中の何かが切れた

「キィサアアアマアアア！！！！！！！！！！」

木野はそう叫ぶとプレシアに殴りかかる

「ッ！！」

プレシアは咄嗟にバリアを張るが、木野のパンチを受けたバリアは
ビシビシビシと碎けてしまう

「な！？」

バリアが破られたことに驚き、プレシアは一瞬動きを止めてしまった

「うおおおおお！！！！！！！！！！」

バキィという大きな音と共にプレシアは大きく吹き飛ぶ

「グッ」

プレシアは起き上がるがその目の前には木野がいた

物凄、怒りの目をした・・・

「いいですか！？、あなたはフェイト君の母親だからこれ以上はやりません

しかし！！、フェイト君は貴様の為に大怪我をしてまで集めたのですよ！！

その思いを無駄にした貴方を私は今、殴り殺したい気分です！！！！

ですがフェイト君の母親だから殺しはしません、しかし！！

次また同じようなことをしたらフェイト君が何を言おうが、貴方を殺します！！！！」

その叫びを聞いていたプレシアは少し顔を歪めたが、木野の手刀で気絶する

「いきましよう、アルフ君」

「あ、ああ」

（ありがとうよ、木野・・・）

アルフは、心の中で本気で木野に感謝した

ガバツとフェイトは起きる

「こ、ここは・・・」

「起きた？」

フェイトは、自分の部屋のベッドから起き上がる

「どうして私はここに？」

「木野がフェイトの事を助けてあげたのさ」

「木野さんが・・・」

「木野ならベランダだよ」

「ありがとう、アルフ」

「木野さん・・・」

「おや？、起きましたか」

「はい、あの・・・、ありがとうございます」

「・・・、いえ、私はお礼を言われる程の事はしてませんよ」

「そう・・・ですか」

「・・・」

「・・・」

「フエイト！、ジュエルシードだよ！」

「！、どこ！？」

「海鳴臨海公園の方！」

「わかった」

「私が転移魔法で移動します！」

木野がそう言うと3人（？）の足元に魔法陣が浮かび上がり移動した

海鳴臨海公園についた3人は、ジュエルシードを取り込んだ

木の化け物を見た

フェイトが攻撃を仕掛けるがバリアで防がれた

「ワアアオ！、生意気に、バリアまで張るのかい」

「今までのより、少し強いですね」

木野の言葉にフェイトは付けたしする

「それに、あの子もいる」

フェイトは、なのはに目を向ける

木の化け物は、地面から根を出し、なのはに向かって攻撃する

「アークセイバー！、行くよ、バルディッシュュ！」

そう言うフェイトは、鎌のような武器を持つ

その鎌――アークセイバーから光波を出し、根を切ってゆく

するとなのはは、デイバインバスターで上から攻撃する

「貫け、豪雷！、サンダースマッシャー！」

フェイトもサンダースマッシャーを繰り出すが、まだバリアは破けなかった

「なんて頑丈な！」

アルフがそう言う木野は木の化け物に向かって行く

「ヌウン！」

木野がパンチするとバリアは碎ける

それを見ていたユーノは

（あ、ありえない、あんな力付くで！！）

と、思っていた

バリアが碎け、木の化け物はディバインバスターとサンダースマツ
シャーを

もろに受ける

「グオオオオオオ！」

そう呻くと同時に倒れ、ジュエルシードが出てくる

「ジュエルシード、シリアル？！」

「封印！」

という言葉が発し、ジュエルシードがまばゆい光を発す

そのまぶしさに木野以外のみんなは、目を閉じた

因みに、木野はサングラスを服の中に幾つも持っており

その内の一つをかけていた

そしてなのはとフェイトは飛び

何か話していた

するとなのはのレイジングハートと、フェイトのバルディッシュが、
デバースモードになる

アルフがなのはに攻撃を仕掛けようとしたが

木野が手で制す

「今、あの子達は、大切な事を話し合っています

ここで水を差す行動をしてはいけませんよ」

と、木野の言葉を聞き、アルフは踏みとどまる

そしてフェイト達が振りかぶり、攻撃をしようとした瞬間

魔法陣が浮かび上がる

その光が消えた所にいたのは、なのはのレイジングハートと

フェイトのバルディッシュを受け止めた青年がいた

第9話（後書き）

はい、木野さんがマジ切れしましたよ!!

どうだったでしょうか？

ぶっちゃけ、木野さんがキャラ崩壊してますけどね・・・

木野さんファンの方には申し訳ないです

第十話（前書き）

木野 「クリスマスイヴについてを語りましょう

クリスマスイヴは、クリスマス・イーヴニングという意味という事は

みなさんは知ってますよね？

実は、クリスマスは、イヴの4時から

25日の4時まで、つまり

25日の6時にはもうクリスマスは終わっているのです

以上、私のちょっとした眩きでした

魔法少女リリカルなのは ANOTHER AGITO STORY

始まります」

第十話

「ストップだ！」

青い魔法陣から少年が現れ、なのはのレイジングハートを左手で掴み
フェイトのバルディッシュを右手に持つ杖で受け止める

「ここでの戦闘行動は、危険すぎる！」

少年がそう言う

なのはとフェイトは、突然現れた少年に驚く

木野は目を細めて少年を見る

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ

詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

「時空・・・、管理局？」

木野は、聞いたことのない組織に疑問を抱く

クロノは、なのはの方に向く

「まずは、二人とも武器を引くんだ！」

そう言い、三人は空中からゆっくり降りる

クロノが口を開く

「このまま戦闘行為を続けるなら・・・、！」

するとクロノに向かって魔法弾が降り注ぐ

クロノは手を翳し、魔法陣のバリアを張る

そうして防ぐが

「フェイト、撤退するよ！、離れて！」

そう言ってアルフが攻撃を仕掛ける

わざと外したのか地面に当たり、土煙が出る

その間にフェイトが、ジュエルシードに向かう

フェイトが手を伸ばした瞬間、青い魔法弾がフェイトを襲う

フェイトは、それに直撃して、空中から墜落してしまう

「フェイト！」

アルフがフェイトの下敷きになって支える

「先に戻っててください、ジュエルシードは私が捕獲します！」

アルフはうなずき、転移する

そして木野は視点を換え、ジュエルシードに向かう

「待て！」

クロノが魔法で攻撃するが、避け、ジュエルシードを掴む

「クソッ！」

またクロノが攻撃を仕掛けるが、かわして

クロノの目の前に出る

木野はクロノにアッパーをする（魔力を練った右腕で）

そしてクロノの意識は暗闇に落ちる

「フウッ、そろそろ私も歳ですかね・・・」

と、木野はいろんな意味で問題発言する

ちなみに木野は、32歳だ

そして木野は転移魔法でここから立ち去る

だがその魔法陣が、アギトの模様をしていたのを

彼は気づいていなかった

ーマンションー

木野はジュエルシードをフェイトに渡す

因みに木野は時空管理局について一通りの事を教えてもらった

しかしアルフが言う

「駄目だよ・・・、時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ！」

逃げようよ・・・、3人で何処かにさあ」

「それは・・・、駄目だよ」

「だって、雑魚クラスならともかく、アイツ一流の魔導師だ！」

本気で捜査されたら、ここだって何時までバレずにいられるか・・・

今は、あんたの母さんだってわけわかんないこと言うし、フェイトに酷いことばっかするし」

「いえ、脅しをかけたから、少しは大丈夫だと思いますよ」

「木野さん、アルフ、母さんの事、悪く言わないで」

「「いうよ（ますよ）！」」

「だって私はフェイトの事が心配だし

フェイトが悲しんでると、私の胸も千切れそうで痛いんだ！

フェイトが泣いてると、私の目と鼻の奥がツーンとして

どうしようもなくなるんだ！」

少し間を置いてからアルフは言う

「フェイトが泣くのも悲しむのも私、嫌なんだよ！」

次に木野が言う

「私は特に特別なつながりがないですが言わせて下さい

貴方は今、孤独だ」

「え？」

木野の以外な発言にフェイトは驚く

「貴方の周りには、アルフ君という使い魔以外、特に何もない

ですが、私は貴方の力になりたい！

少し私の過去を聞いてください

私には、昔、弟がいました

ですが、雪山に二人で行き、遭難してしまいました

そして弟は死にました

その時は、どうなったと思いますか？

寂しかったですよ、友達もいない

親もいない、周りには人がいなかった

だから貴方にはそんな気持ちになってほしくないのです

ですからせめて貴方には、何時も隣に人がいてほしいのです」

「木野さん・・・、アルフ・・・」

するとフェイトは気絶する

「フェイト！」

アルフが近寄る

「・・・、疲労が溜まっているのでしよう

寝かせた方がいいですね」

「木野・・・、ありがとうな」

「・・・」

第十話（後書き）

また木野さんがキャラ崩壊・・・、うーん

第十一話（前書き）

所でみなさんこの作品はシリアスだと思いますか？

自分は基本シリアス、時々ギャグを混ぜているつもりですが・・・

第十一話

翌日

木野達は、湖に来ていた

「フェイト、駄目だ、空振りみたいだ」

「そう・・・」

「やはり、向こうに見つからないようにジュエルシードを探すのは難しいですね」

「でも、もう少し頑張りましょう」

「そうですね」

「うん」

と、フェイトの言葉に二人は頷く

木野達は海の上に来ていた

するとフェイトが呪文を唱える

「アルカス、クルタス、エイギアス

煌めきたる天神よ、今導きの事を振り来たれ

バルエル、ザルエル、ブラウゼル」

とフェイトが言うのと雷が落ちる

「フェイト君は何をやっているのですか？」

木野は良く分からず、アルフに聞く

「ジュエルシードは、多分海の中、だから、海に電気の魔力龍を叩

き込んで

強制発動させて、位置を特定するのさ」

「なるほど、・・・ちよつと待ってください！

それじゃ、フェイト君は・・・」

呪文が唱え終わったのか、妙な黄色い目のような物が現れ

電気を海に流す

すると海が荒れ、ジュエルシードの光が六つ現れる

しかし無茶をしたフェイトの息は荒い

「ハア、ハア、見つけた！」

「これだけの魔力を打ちこんで、さらに全てを封印するなんて

フェイト君、なんて無茶を、貴方の魔力は、・・・もう」

「アルフ、空間結界とサポートをお願い

木野さんは、ジュエルシードを取るのを手伝って！」

「ああ、任せといて！」

そう返事を返して木野に耳打ちする

「フエイトの事、頼んだよ」

「ええ、任せてください、何が起きようが私達がフエイト君を守りましょう」

「ああ！」

そして木野はフエイトについて行く

「行きましょう、木野さん」

「ええ、いきましょるか」

木野とフエイトは、ジュエルシードに向かってゆく

しかしフエイトは途中で押し返され、落ちてゆく

「フエイト！」

アルフが助けようとするが、電気で近づけなくなる

落ちる寸前、木野がフエイトを支える

「大丈夫ですか？」

「あ、はい」

すると木野はアルフの所に向かう

「フエイト君を守っていてください」

「え？、木野さん！」

フェイトも行こうとするが

「フェイト君、・・・ここからは大人の仕事です

子どもは休んでいてください」

「でも！」

「フェイト君！！、大丈夫ですから」

と、木野はフェイトに微笑む

フェイトはその微笑みに安心感を覚える

「では、アルフ君、頼みましたよ」

「ああ、気を付けてな」

「ええ」

と木野は言い、ジュエルシールドに向かう

（思ったよりも激しい、だが！）

と、ジュエルシールドの攻撃をかわして

その一つを掴む

（一つ！、又オッ）

ジュエルシードの攻撃が右足に当たってしまう

（クッ、だが！）

しかし途中でなのはが来て、フェイトのデバイスに魔力を分け与える

そしてフェイトも木野に向かう

そのなのはの目には、何か、強い意志を木野は感じた

そしてユーノも現れ、ジュエルシードの動きを止める

「木野さん！」

「なのは君！、フェイト君！、どうして・・・」

「手伝います！、ジュエルシードと一緒に止めましょう！」

「・・・、ええ、今回は休戦ですね」

「はい！」

「行きましょう、二人とも」

というフェイトの合図に3人はジュエルシードに向かう

「ユーノ君やアルフさんが止めている今のうちに！」

3人でせーので一気に封印!」

「わかりました、合図は私が言います」

「はい!」

木野がいい、二人は頷く

そして別れて二人は準備をする

木野も準備するが、魔法陣ではなくアギトの模様が浮かび、驚くが
すぐ考え直す

(どうやら私の魔力は、アギトの力の様ですね)

「いきますよ二人とも!

せーの!」

「サンダー!、・・・」

「ディバイン!、・・・」

「ダーク!、・・・」

上から順に、フェイト、なのは、木野が言う

そして・・・

「レイジ！」

フェイトがそう叫び

ジュエルシードに電撃を食らわす

「バスター！」

と、次になのはが、砲撃を食らわし

最後に

「ブラスト！」

と、木野が黒い砲撃を食らわす

そしてジュエルシードは封印された

木野とアルフは間を開けて

フェイトとなのはを見ていた

二人は名前を教えあっている

「こういう光景は、良い物ですね」

「ああそうだね」

そしてなのはがこういう

「友達になりたいんだ」

と、・・・

それにフェイトとアルフは目を見開く

しかし、空から砲撃魔法が落ちてくる

「この魔法は！」

と、アルフが言う

そしてフェイトは・・・

「母さん・・・」

その砲撃がフェイトに落ちてくる

フェイトは目を瞑ったが

誰かに突き飛ばされる

驚いて目を開けるがそこには・・・

「」「木野（さん）！！！！」「」「」

と、ユーノとアルフとフェイトとなのはが言った

「ヌツ、グツ、ガアアアアア！！！！！！」

木野の絶叫が鳴り響く

4人は突き飛ばされ

砲撃が止み、木野は海に落ちてゆく

「木野さん！」

と、フェイトが木野を助ける

そしてアルフがジュエルシードに向かうがクロノに阻まれる

「邪魔を・・・、するなああああ！！！！！！」

アルフはクロノをはじき返し、ジュエルシードを見る

「3つしかない！」

クロノを見ると2つクロノが持っていた

そしてクロノのデバイスの中に入れられる

アルフが海に魔法を放つ

それにクロノとなのはは、目を瞑る

目を開いたところには、もう3人いがい誰もいなかった

第十二話

「グッ、クッ、クウ」

木野がうめき声を上げる

3人は撤退した後マンションに戻っていた

「木野！、しっかりしろ！、木野！」

アルフが木野の心配する

「木野さん！、木野さん！」

フェイトも木野の心配をする

木野は、砲撃を受けた時、生身の状態だったため
かなりの重症なのである

「グッ、ボハッ！」

木野が吐血する

「木野！、くそっ、あいつ、なんで・・・」

「ごめんなさい、ごめんなさい木野さん」

「ガハッ、だ、だいじょグハッ！」

「木野！」

大丈夫と言いかけたがまた吐血する

「・・・ごめん二人とも、母さんの所に言ってくる」

「フェイト！、いっちゃだめだ！、また酷い目に「でも！」」

「でも、母さんの所に行かないと」

「フェイト！」

「ごめん・・・」

フェイトは、アルフを気絶させる

そしてフェイトは、時の庭園に向かった

「グッ、フェイト！、ごめん木野、フェイトの所に私、行くね」

「ええ、き、気を付けて」

起きたアルフは木野に言い、すぐ時の庭園に向う

そこで見たものは・・・

「フェイト！、フェイト！」

前以上にボロボロで気絶したフェイトだった

アルフはフェイトを抱き寄せる

そしてマントを被せてプレシアの所に向かう

壁を壊し、プレシアの姿があった

そして階段を降りてゆく

そしてプレシアに飛びかかるが、バリアで行く手を阻まれる

プレシアがアルフの方に向き、ニヤリと笑う

「グッ」

それでもまた飛びかかる

そして今度はバリアを破壊してプレシアの胸倉をつかむ

そして叫ぶ

「あのたはあの子の母親で、あの子はあんたの娘だろ!？」

あんなに頑張っている子に、あんなに一生懸命な子に・・・

なんであんな酷いことが出来るんだよ!!?」

と、アルフは怒りながら叫ぶ

しかしプレシアの魔法により弾き飛ばされる

そして壁にぶつかる

「グッ、フェイトは、あんたの娘は、あんたに笑ってほしくて

優しいあんたに戻ってほしくて、あんなに！、ッグ」

そう叫ぶも、痛みで言えなくなる

しかしそれが聞こえるのか聞こえないのか

プレシアは杖を持つ

「邪魔ね、・・・消えなさい！」

と、情け容赦無い声で殺そうとするが

突然アギトの模様が現れ、木野が出てくる

「木野！」

そして木野が手を翳すとアギトの模様が出て、プレシアの攻撃を防ぐ

しかし木野は膝をつき

吐血する

「ヌッ、グッ、ガハッ」

「木野！、あんたそんな体で・・・」

「グッ、アルフ君、すみませんが転移します！」

といい、木野は素晴らしい転移する

「グッ、アルフ君、大丈夫ですか？」

「ああ、な、なんとか・・・ね」

プレシアから逃げ、森の中に二人いた

因みにアルフは狼の姿だ、そして腹部がプレシアの魔法により怪我をしている

「・・・、人が・・・来たようですね」

二人に近づく人間の気配を感じた木野

「アルフ君、少し・・・、寝ますね」

「ああ、私も・・・眠い」

「フェイト君・・・、すみません」

そして二人の意識は闇に落ちた

ガバツと木野は起きた

（こ、ここは・・・）

「起きましたか」

木野は周りを見回す

そして執事みたいな老人を見つけた

「な、何故私はここに？」

「森の中で見つけてここに運んできたのです

お怪我の具合はどうでしょうか？」

木野は自分の体を見る

体中に包帯が巻かれていた

「ありがとうございます」

「いえいえ、どうぞお気になさらず」

「グッ、ガハッ」

木野はまた吐血する

「だ、大丈夫でございましょうか？」

「ええ、だ、大丈夫です」

「ならいいですが・・・、今日はもう遅いので
泊まっていてください」

「ですが、グッ」

木野は脇腹を抑える

「すいません、お言葉に甘えます」

「ではどうぞ、おやすみなさい」

「ええ、では」

執事風の男は出ていく

（グッ、申し越し寝た方が良いでしょうですね

アルフ君、聞こえますか？）

木野が念話でアルフに話しかける

（木野かい？）

アルフの声が聞こえる

(よかった、グッ、すみません、せっかく念話できたのに寝てしま
いです)

(ごめん、私も寝そうだ、また明日ね)

(ええ、また明日)

(ん?、朝ですか)

木野は目が覚める

すると部屋に金髪の女の子と昨日の執事風の男が現れる

「目が覚めたみたいね」

「あの、貴方が私を？」

「ええそうよ、血を流して倒れていた貴方と

大型犬を見つけたの」

（大型犬www）「まあとりあえずありがとうございます」

大型犬という言葉聞き木野は頭の中で笑う

「どういたしまして、貴方の名前は？」

「木野 薫と申します」

「木野さんね、私はアリサ・バニングスよ」

「アリサさんですね」

「呼び捨てで結構よ」

「ではアリサ君で」

「ええ、すみませんが学校に行くのでこれで」

「ええ、所でアルフ君は・・・」

「あの大型犬の事？」

外に檻の中にいるわ、それじゃあね」

アリサが出ていき、木野も出ていく

そして木野はアルフの方に行く

「アルフ君、起きてますか？」

「念話で話して」

（おっと失礼、・・・具合はどうですか？）

（あまりよくはないよ、貴方はどうなのさ）

（私もアルフ君と同じ位ですよ）

（そうか・・・）

（・・・すみません、そろそろ行きますね）

（ああ、じゃあな）

木野はその場を後にした

数時間後

（・・・アリサ君が帰ってきたか）

木野は外に出る

「！
」

そこにはアリサの他になのはの姿があった

そしてアリサ達はアルフの方にいった

念話の話が聞こえ、話が終わり、アリサ達は玄関に行く

そしてなのはは、木野を見て驚く

（なのは君・・・）

（木野さんだったんだ、黒尽くめの怪しいおっさんって）

（お、おっさん・・・）

（プププ、おっさんだってさWWW）

（わ、笑うなー！！）

木野は頭の中で叫ぶ

そしてアリサ達は屋敷に入ってゆく

（ユーノ君）

（あ、木野さん）

（時空管理局のみなさんも私の声は聞こえてるんですね？）

（はい）

（一通り話し終えたようですね）

（ああ、・・・なのは・・・、といったね）

（あ、はい）

（頼めた義理じゃないけど、．．．だけど、お願い．．．

フェイトを助けて．．．）

（私からもお願いします．．．、今のあの子は

一人ぼっちなのです．．．）

（はい、大丈夫、任せてください）

―翌日―

朝早く、アルフと木野はバイクに乗って走っていた

走ってゆくとなのはの姿が見え、なのはを乗せる

「つかまってください、全速力で行きますよ！」

するとバイクが変わり、アナザーアギト状態になった時の姿

『ダークホッパー』になる

そして4人は海鳴臨海公園に来た

バイクにブレーキをかけ、止める

そして降りる

そしてなのはが言う

「ここならいいね、出てきて、フェイトちゃん！」

するとバルディッシュの声が聞こえ、4人はその聞こえた方向に向く

そこにはフェイトの姿があった

そして木野が口を開く

「フェイト君、もうやめましょう、貴方の母が言うこと・・・

もう聞く必要なんかありません」

次にアルフが言う

「そうだよフェイト、このまんまじゃ不幸になるばかりじゃないか・
・

だからフェイト！」

そう説得するがフェイトは首を横に振り、言う

「だけど・・・、それでも私は、あの人の娘だから・・・」

するとなのはが姿を変え言う

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね

逃げるってわけじゃもつとない

きっかけは、きっとジュエルシード

だから賭けよう、お互いが持っている全部のジュエルシードを！」

するとなのはの周りにジュエルシードが現れる

そしてフェイトの周りにもジュエルシードが現れる

するとなのはが笑いながら言う

「それからだよ」

そしてなのはがレイジングハートを構える

フェイトもバルディッシュを構える

そしてなのはが言う

「始めよう、・・・最初で最後の本気の勝負！！」

なのはとフェイトの戦いの幕が、今開く

第十二話（後書き）

少し大袈裟ですけど

この位やった方が読者様も面白くなるんじゃないかな

って思ってやったんですけど・・・おかしいでしょうか？

第十三話（前書き）

今回、木野さんに新フォームが！

第十三話

「なのは君!」

「はい!」

木野がなのはを呼ぶ

「絶対に、・・・勝ってくださいね!」

「は、はい!」

木野の言葉になのはは、頷く

そしてフェイトとなのはは、空高く飛び、一瞬突撃する

すると二人とも跳ね飛ばされ、距離が開く

二人の周りに魔法の球体が出てくる

そして二人同時に放ち、二人とも避けてゆく

フェイトは、その内の一つを防御し、なのはに向く

なのはの周りには、また魔法の球体があった

そしてなのはがそれを放つ

フェイトはアークセイバーでそれを切ってゆく

そして最後の一つを避け、なのはに突進する

なのはは、咄嗟にバリアを張り、フェイトの攻撃を防ぎ

フェイトが最後に避けた魔法の球体を操り、フェイトに放つが

フェイトも咄嗟にバリアを張る

そしてなのはのいた方向に向くが、そこにはなのはの姿はなかった

キョロキョロと周りを見るがいなかった

しかし突然なのはの声が聞こえ、向く

そこは、フェイトの頭上だった

なのはの攻撃をバルディッシュで防ぐ

その瞬間、二人が光に包まれる

そしてフェイトがなのはに切りかかる

なのはは、寸止めの所で避けるが、避けた先にあったのは

黄色い、フェイトの魔法の球体だった

「くっ！」

なんとか全て防ぐが、なのはとフェイトのスタミナは、もう残り少

なくなっていた

フェイトの周りに、さっきの数の数倍の魔法の球体が現れる

なのはは、動こうとするが、バインドで動けなくされる

ユーノとアルフがサポートを入れようとするが、木野に止められる

「木野！、あんた何を・・・」

「そうです！、貴方はなのはに勝ってほしいんじゃ」

「そうです」

「なら何故！」

「今、あの子たちは、真剣勝負の真っ最中

そこに横槍を入れるのは失礼です」

「でも」

「それに！、・・・私はなのは君の持っている力のみで勝つのを望んでいます」

ここで横槍を入れたら私は貴方達を攻撃します」

「・・・わかったよ」

「わかりました・・・」

ユーノとアルフは食いさがる

そしてフェイトは、魔法の球体を打つ

その魔法の球体は、なのはに向かい当たり、煙を上げる

「なのは！」

「・・・」

木野はその様子を冷静に見ていた

そしてフェイトは一回り大きい魔法の球体を頭上に持つ

煙が晴れるとそこには無傷のなのはがいた

そしてなのはは、ディバインバスターを放つ

フェイトもその魔法の球体を投げるが、ディバインバスターに打ち消される

そしてそのままディバインバスターはフェイトに行くが、防ぐ

が、フェイトはもうボロボロだった

「フェイト！」

アルフがフェイトの心配をする

するとなのはが避けられた魔法の球体を集める

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」

そして数倍大きい魔法の球体が出る

フェイトは動こうとするがバインドで動けなくされる

そしてなのはが言う

「これが私の全力全壊！」

スターライト・・・ブレイカー！！！！！！」

そう言いスターライトブレイカーを放つ

そのスターライトブレイカーは、ディバインバスターの3倍はある
だろうか・・・

その位の大きさのある魔法を放った

放った後のなのはの体力や魔力はもう尽きかけていた

そしてフェイトはスターライトブレイカーをもろに受け、気絶していた

そして海に落ちる

「フェイトちゃん！」

なのはが行こうとするが、魔力が尽き、なのはも落ちる

「なのは！」

「フェイト！」

「トゥー！！」

木野が海の中にもぐり、二人をなんとか陸地に持ってきた

（二人共体重が軽くてよかった）

と、木野は場違いな事を思う

そしてフェイトが目を開ける

「う、木野さん？」

「よかった、大丈夫ですか？」

「はい、なんとか」

「ありがとうございます、木野さん」

なのはが礼を言う

「いえいえ、・・・！！」

木野は何かの気配を感じた

（この気配・・・まさか！）

「どうしたんですか？」

「すみません、一仕事行ってきます」

「一仕事？」

「少し待っていてください、アルフ君、ユーノ君

二人を見ていてください」

「え？、わ、わかりました」

「おう、行ってきたな、木野」

「ええ、すぐ戻ってきます」

それでは」

そして木野はその場を離れる

「どうしたんだろ木野さん」

「見つけたぞ！、アンノウン！」

「ギシャ？」

木野の向かった先は、森の中だった

そこには前に取り逃がしたアンノウンがいた

そして木野は両手を腹部で交差させる

「変身！」

と木野が言うのと緑の光に包まれ、アナザーアギトに変わる

「シャッ！」

アンノウンは、周りと同化し、姿を消す

「！、どこだ・・・」

すると木野の背中に衝撃が走る

「ぬおっ、くっ」

すがたが見えない敵を相手にさらにパワーアップした相手に

木野は言う

「時間がない、すぐにケリを付ける」

木野は腰の右側を押す、するとアナザーアギトが緑から青に変わる

『アナザーアギト ストームフォーム』になり、両足が変わる

「シュウウ」

木野が神経を研ぎ澄ませる

「シャアッ!!」

アンノウンが攻撃を入れるが紙一重避け、顎に蹴りを食らわす

「シャアッ!」

効いたのか敵が姿を現す

「シュウッ!!」

アナザーアギトが目で追い付けないほど早い連続キックを腹部に集中して当てる

「トウ!!」

そして最後に強烈なキックを浴びせる

「ガアッ!!」

その強烈なキックを食らい、アンノウンは後退する

するとアンノウンの頭上に青い輪が浮かび上がる

「グッ、ガッ、グアアアアアアアア！……！！！」

断末魔の悲鳴を上げ、爆発する

するとジュエルシードが三つ飛んできて、三つとも掴む

「フゥ」

そして木野は変身を解き、なのは達の所に向かった

戻った先には、ボロボロのフェイトの姿があった

「フェイト君！」

木野がフェイトに近づく

「何があっただんですか！？」

「それが・・・」

なのはとユーノは事情を説明した

「そんなことが・・・、フェイト君・・・」

「とにかく、アースラで治療しましょう！」

ユーノの言葉になのはが頷き、4人はアースラに転移する

一通り治療が終わり、なのはは、フエイト達をある場所に連れてゆく

そこには、緑色っぽい髪の色をした女性がいた

「はじめまして、フエイトさん、木野さん

私はリンディ・ハラオウン」

「はじめまして」

「・・・」

フエイトは下を向いていた

そして手にはバルディッシュを持っていた

「あ、リンディさん」

「何です？」

「これを・・・」

「ジュエルシード！？、どうして・・・」

「いえ、ちょっとですね・・・」

「まあいいでしょう、ありがとうございます」

木野は、さっき手に入れた三つのジュエルシードを渡す

そしてフェイト達は目の前にあるモニターを見る

モニターには何人もの時空管理局員がいた

その光景を黙ってみんなは見ていた

するとプレシアは管理局員に囲まれる

数人の管理局員がもっと奥に行くと

廊下のような所に出る

その奥を見てフェイト達は驚く

そこには・・・

「フェ、フェイト君！！？」

そこには、フェイトそっくりな女の子が、カプセルの中で眠っていた
しかし突然プレシアが現れ、管理局員を吹き飛ばし、こう言った

「私のアリシアに近寄らないで!!!!!!」

と、言い、管理局員達は身構える

そして攻撃するが、防がれる

そしてプレシアは管理局員を気絶させ、狂気の笑い声を上げる

「アリ・・・シア・・・？」

と、フェイトが言う

そしてプレシアが振り向き、言う

「もう、終わりにする

この子を亡くしてから暗鬱な時間

この子の身代りの人形を娘扱いする」

その言葉になのはとフェイトは驚く

そして木野は、手を握りしめていた、血が出るほどに・・・

「聞ってるフェイト？、貴方の事よ

せっかくアリシアの記憶を上げたのにそっくりなのは見た目だけ
役立たずでちっとも使えない・・・私のお人形・・・」

すると茶髪（？）の管理局員が言った

「最初の事故の時にね、プレシアは、実の娘

アリシア・テストロッサを亡くしているの

彼女の最後の研究は・・・、人工生命」

「「！」」

人工生命という言葉にユーノとアルフは驚く

「そして・・・、死者蘇生の秘術、・・・フェイトという名前は

当時、彼女の研究に付けられた、開発コードなの」

その言葉にプレシアは言う

「よく調べたわね、そうよ、そのとおり

・・・だけど駄目ね、ちっとも上手くいかなかった、

作り物のいのちは、所詮作り物・・・失ったものの代わりには

ならないわ・・・」

そしてプレシアはフェイトの方に向き、残酷に言った

「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ、

アリシアは時々ワガママも言ったけど

私の言うことをとても良く聞いてくれたわ」

「やめて」

なのはが言うがプレシアは構わず続ける

「アリシアは、何時でも私に優しくった・・・」

そしてまたフェイトの方に向く

「フェイト、やっぱり貴方はアリシアの偽物よ、・・・

せっかく上げたアリシアの記憶も、貴方じゃ駄目だった」

「やめて・・・、やめてよ！」

なのはが声を上げ言うがプレシアは言う

「アリシアを蘇らせるまでの間に慰めに使うだけのお人形

だから貴方はもう要らないわ、・・・どこへなりとも消えなさい！」

と、吐き捨てるように言う

「お願い！、もうやめて！」

と、なのはが言うがプレシアは笑う

「フフフ、良いこと教えてあげるわフェイト、貴方を作りだしてか
らずっとね

私は貴方が・・・・・・・・大嫌いだったのよ！！！！！」

という非情な言葉にフェイトは気絶する

「フェイト君！」

木野がフェイトを抱える

フェイトの目には、光が籠っていなかった

その目に木野は涙する

「木野さん・・・」

「フェイト君、・・・」

木野は床を叩きつける

「大変です！、屋敷内に魔力反応・・・・多数！」

その言葉に木野達はモニターを見た

そこには、妙なヨロイ達が出てくる

そして時の庭園が崩れ始める

すると管理局員の一人が言う

「次元震です！」

その言葉にリンディは指示を出す

そしてプレシアが笑いだす

木野はモニターを見、立ち上がる

「行きましょう・・・、時の庭園に！」

第十三話（後書き）

技名・・・どうしよう・・・

第十四話

木野達は、意識のないフェイトを医務室に担いでいった

途中クロノに会う

「クロノ君、どこへ？」

「現地に向かう、元凶を叩かないと」

「私も行く！」

「ぼくも！」

と、なのはとユーノが言う

「私も「木野さんは残っていてください」」

と、クロノは木野に言う

「今のフェイトには貴方が必要なんです、フェイトの事を看っていてください」

「・・・わかりました」

木野は頷き、アルフと一緒に医務室に行った

そして医務室にあるベッドにフェイトを寝かせた

アルフはモニターを少し見て、木野に言う

「なのは達が心配だから、少し手伝ってくるね」

「私も行きます」

アルフと木野が出ていくとフェイトは目に光を戻し、モニターに目を向ける

そこに写るのは達の姿を見、思う

（母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった・・・

・・・私が生きていたと思ったのは、母さんに認めてほしかったからだ・・・

・・・どんなに足りないといわれても、どんなに酷いことされても・・・

・・・だけど、笑ってほしかった・・・

・・・あんなにハッキリと捨てられた今でも、私、まだ母さんにすがりついてるの・・・）

モニターにアルフと木野がなのはに話しかける姿が写った

（アルフ・・・、ずっと傍にいてくれたアルフ・・・、言うことを聞かない私に・・・

きつと随分悲しんで・・・

木野さん、・・・お父さんの様に私の事を心配してくれて、いつも私に微笑んでくれた・・・

そして何時も私の事を守ってくれた・・・

私が日常生活で、一番楽しかったのは、木野さんが私に微笑んでくれた事・・・

・・・何度もぶつかった、真っ白な服の女の子・・・

初めて私と対等に、真っ直ぐ向き合ってくれたあの子・・・

何度も出会って、戦って、・・・何度も、私の名前を呼んでくれた・・・

・・・何度も、何度も・・・

するとフェイトは、目に涙を溜め、起き上がる

（生きていたいと思ったのは、母さんに認めてもらいたかったからだ・・・

それ以外に、生きる意味がないと思ってた・・・それが出来なきゃ、生きていけないと思ってた・・・）

フェイトは涙を流しながら立ち上がる

（捨てればいいってわけじゃない、・・・逃げればいいってわけじ

や・・・もつとない)

フェイトはボロボロになったバルディッシュを持つ

(私の・・・私達の全ては、まだ始まってもない)

そしてフェイトはバルディッシュを起動させる

その頃、木野達は、鎧達と戦っていた

「フン、フン、ヌウ!!」

木野は手足に魔力を練り、パンチやキックで鎧達を倒してゆく

「トウ！！」

空を飛ぶ鎧達に対しては、ジャンプして乗っかり、首を捻り、引き千切ってゆく

「キリがない！」

と、アルフが弱音を吐くが

木野は諦めず、倒してゆく

「ハア！」

ユーノも一部の鎧達の動きをバインドで止めてサポートするが
バインドを引き千切られる

「はっ、なのは！」

その引き千切った鎧は、なのはに切りかかる

その斧を持つ鎧を目の前に、なのはは、目を瞑るが

上から雷が落ちてくる

その方向にいたのは・・・

「フェイト？」

フェイトだった、因みに今言ったのは、アルフで、素っ頓狂な声だった

そしてフェイトはなのはの前に降りてゆくが、17メートルくらいの鎧が現れる

その鎧は、ほかの鎧達と違い魔法を放つ

二人は避けて、ユーノとアルフがバインドで動きを止めるが、両腕のバインドを引き千切られる

「なのは！」

「フェイト！」

両足の動きを二人で何とか止めるが、鎧の腕がなのは達に向かってゆく

しかし途中で黒いバインドが現れ、両腕を止める

バインドの先には・・・

「「「木野^{さん}！」「」」

木野がバインドを両手で持っていた

「みなさん知っていますか？、バインドにはこういう使い方もあるんですよ！」

と、木野がバインドを操り、ギリギリと締め上げ、ついに耐えられなくなった両腕は千切れ、

落ちてゆく

「ユーノ君！、アルフ君！」

木野が叫び二人は頷き、二人ともバインドを締め上げ、千切る

両腕、両足が無くなり支えがなくなった胴体を木野がバインドで縛り

上に投げる

「今です！、二人とも！」

木野の言葉に二人は頷き、レイジングハートとバルディッシュを構える

そして二人同時に放つ

「サンダー・・・スマッシュー！！」

「ディバイーン・・・バスターー！！」

その二人の砲撃魔法をまともに食らい、爆発する

その爆発に時の庭園の一部が崩れた

巨大な鎧を倒し、アルフは人間態になり、フェイトに泣きながら抱きつく

「アルフ・・・、心配かけてごめんね

ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ、本当の私を・・・

木野さん」

「何です?」

「ありがとうございます、さっきの時も」

「ああ、いいですよそんな事、そんな事より

もうすぐゴールです、行きましょう」

「はい！」

4人は走って行った

奥にある大きな扉を破壊し、4人は中に入ってゆく

「あそこのエレベーターから、中心部に行ける」

「うん、ありがとう、・・・フェイトちゃんは、お母さんの所に？」

「うん」

なのはは、レイジングハートを床に置く

「私・・・、その・・・、上手く言えないけど・・・、がんばって・・・」

「うん、・・・ありがとう」

するとユーノが走ってくる

「今クロノが一人で向かってる！」

急がないと間に合わないかも！」

「フェイト！」

「うん」

「行きましょう！」

木野とフェイトとアルフの3人は、長い廊下を走っていた

「フェイト君」

「なんですか？」

「プレシアに会ったらどうするつもりですか？」

「・・・、思いをぶつけます」

「・・・」

その言葉を聞き、木野は黙る

しばらく走ってゆくと、大きな穴のある所に出る

その穴から3人は飛び下りる

そこにいたのはクロノとリンディ、そしてアリシアと吐血したプレシアだった

フェイトはプレシアに近づく

「母さん」

「何をしに来たの？、消えなさい、もう貴方に用はない」

近づくフェイトにプレシアは冷たく言い放つ

「貴方に、言いたいことがあってきました・・・」

・・・私は・・・」

フェイトは目をつぶって言う

「私は、アリシア・テストロッサではありません

貴方が作った、タダの人形かもしれません・・・

だけど・・・私は、・・・フェイト・テストロッサは、貴方に生み出してもらって

育ててもらった、貴方の娘です！」

その言葉を聞き、プレシアは笑いだす

「フッフ、アハハハハハ！」

だから何？、いまさら貴方を娘と思えというの？」

「貴方が、それを望むなら・・・、それを望むなら、私は、

世界中のだから、出来ごとも、貴方を守る・・・

私が、誰からの娘だからじゃない、・・・貴方が、私の母さんだから！」

そういつてフェイトは前に踏み出し、手を前に伸ばす

木野は一瞬プレシアの顔が変わるのを見逃さなかった

しかしプレシアは

「くだらないわ」

といい、ジュエルシードを出す

そして時の庭園が崩れ始める

しかし木野が一瞬でプレシアの前に行き、そして・・・

殴った

「!？」

そのことに驚いたが、殴られてプレシアは吹き飛ぶ

「ゴホッ、いったいなにを・・・」

ガシッと木野はプレシアの胸倉をつかむ

「貴方は、・・・貴方は、そのまま逃げるつもりですか？」

「ッ、な、何を・・・」

「貴方は、フェイト君に謝らなくていいのですかと聞いているんです！」

「何故私があの子に・・・」

「勝手に生み出しておいて、そのまま娘の死に逃げて、最後に捨てる？」

ふざけるな！！！！」

その叫びにそこにいた全員が驚く

「フェイト君は、貴方を最後まで信じ続けた・・・、貴方に捨てられた今も

信じ続けているのですよ！！！！」

「ッ！」

「そんな純粋な子に貴方は謝らないのですか！！！！」

「ッ、・・・嫌よ、なんでそんな」

バシント、木野はプレシアにビンタをする

「貴方は、そうやってずっと逃げ続けている、そのことにもう貴方は気付いているはずです!」

「もう辞めて」

フェイトは止めるが木野はまだ言う

「貴方に育てて、どんなに酷いことをされても、フェイト君は

貴方を信じ続けた・・・、貴方は、フェイト君の事が嫌いわけじゃないのでしょうか？」

「いいえ、私はフェイトが嫌い」

「・・・では、その頬に流れているモノはなんですか？」

プレシアの頬には、紛れもない、涙が流れていた

「貴方は、フェイト君の事を、心の底でフェイト君の事を愛していた」

「そ、そんな事は・・・」

「言えないでしょうか?、本当にフェイト君の事が嫌いならば

最初から引き離す物です、でも貴方はそうしなかった

貴方は、心の底で、フェイト君の事を愛していた、違いますか？」

「……、まさかそこまで見抜かれるなんて……」

「ではやはり……」

「ええ、そうよ、どんなに憎んでも嫌いでも

あの子を私は憎み切れなかった……、本当に嫌いになれなかった」

プレシアは立ち上がり、フェイトに言った

「ごめんなさい……、フェイト」

「お母さん……」

フェイトは涙を流す

しかし床に亀裂が入り、崩れる

「木野さん！」

なんとか木野は床を掴むが、もう一方の手にはプレシアが握られていた

「何故、私を？」

「貴方にフェイト君はまだ、愛情を注がれていない

フェイト君には、親の愛情というものを知ってもらいたいのですよ

親の愛情を知っていたのは、アリシアの頃ですからね」

しかし、手が痺れてゆき、支えている手も滑ってゆく

「く・・・」

「・・・、もういいわ」

「え？」

「フェイトの事・・・、頼んだわよ」

「な、なにを・・・、!!!!!!!!!!!!!!」

プレシアは、自ら手を離す

「プレシア!!!!!!!!!!」

そして、次元の中に飲み込まれていった・・・

第十五話 無印編 完結（前書き）

すみません

やっぱり時系列を原作と同じにします

どうでもいいですが、木野さんが無印opにでてくるなら

アルフの次に出てきて

木野さんが後ろ姿で出てきて

カメラが少しずつ木野さんに近付いて行き

近付いてくる間にサングラスを少しずつずらしてゆき

目の前にきたら笑って片目を覗かせているような感じですね

第十五話 無印編 完結

「木野さん！」

「木野！」

フェイトとアルフが木野を引き上げる

「大丈夫かい？、木野」

「ええなんとか、・・・」

「木野・・・」

「申し訳ありません、フェイト君・・・、プレシアさんを助けられなくて・・・」

「いいんです、木野さん、それよりも早く脱出しましょう！」

フェイトの言葉に頷き、一回次元の中を見、転移魔法で移動した

アースラに戻ってきた木野達は、すぐ手錠をかけられ、独房に入れられた

木野の方は、手を後ろに回され、手錠をかけられた

そしてクロノとなのはは、木野とフェイトの処遇について話していた

「クロノ君」

「何だ？」

「木野さんとフェイトちゃんはどうなるの？」

「事情があったとはいえ、彼女が次元干渉犯罪を犯したのは事実だ
重罪だからね、

彼も、彼女の為だとはいえ、犯罪を犯した、

数百年以上の幽閉が普通なんだが・・・」

「そんな」

「なんだが！、状況が特殊だし、彼女等が自らの意思で、

次元犯罪に加担していなかったのもハッキリしている

後は、上層部にその事実をどう理解させるか、その辺にはちよつと自信がある

心配しなくていいよ」

「クロノ君・・・」

と、なのはが涙目になって笑う

「何も知らされず、ただ母親の願いをかなえるに一生懸命なだけだった子を

罰すほど、時空管理局は冷徹な集団じゃないからね・・・」

「クロノ君って、もしかしてすごく優しい？」

「んなっ!？」

クロノの顔は一瞬で赤くなる

「うふっ」

「あは・・・は・・・」

その顔になのはは、笑い、ユーノは苦笑いする

「し、執務官として当然の発言だ！

私情は別に・・・入ってない！！」

「あはは、別に照れなくていいのに」

「て、照れてない！！」

独房に入った木野は、なんとなく天井を見上げた

「どうかしたのかい？」

「いえ、なんとなく・・・、ね・・・」

「ふうーん」

「フェイト君・・・」

「何です？」

「ごめんなさい、プレシアさんを助けられなくて・・・」

「いいんですよ、もう・・・」

「・・・」

木野はまた、天井を見上げた・・・

しばらくしてクロノの声が聞こえた

「アースラはこれより、本局に移動する

だが少しの間、外に出る許可を得た

どうする?」

クロノの問いかけにフェイトは答えた

「もう一度、あの白い服の子に合わせてくれる?」

「わかった、連絡しておこう」

するとフェイトと木野の手錠が外れ、扉が開く

「ついてこい」

と、クロノは素っ気なく言い、歩いて行く

木野達も、クロノについて行く

木野達が来たのは、海鳴市の海岸だった

「もう少しするとなのはが来る

しばらく待っていてくれ」

「わかりました」

と、木野は言う

またしばらくするとなのはの声が聞こえてきた

「フェイトちゃん！」

という声に振り向く

そのなのはの姿を見てフェイトは微笑む

「あんまり時間は無いんだが、しばらく話すといい、僕達は向こうに行くから」

「ありがとう」

「ありがとう」

フェイトとなのはが礼を言い、木野達は離れてゆく

因みに木野はやっぱりサングラスをしている

離れたのを見届けた後、二人は顔を合わせる

「なんだか、いっぱい話したい事あったのに変だね

フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった」

「私は・・・、そうだね、私も上手く言葉に出来ない・・・

・・・だけど嬉しかった」

「え？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて・・・」

「うん、友達になれたらいいなって思ったの」

顔に笑みを浮かべながらいうがすぐ落ち込む顔になった

「でも、これからすぐ出掛けちゃうんだよね」

その言葉にフェイトも落ち込んだ顔をする

「そうだね、少し長い旅になる・・・」

「また会えるんだよね？」

なのはの問いかけにフェイトは頷く

「少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから・・・

来てもらったのは、返事をするため・・・」

「え？」

フェイトの以外な言葉になのはは、疑問に思う

「君が言ってくれた言葉・・・、友達になりたいって・・・」

「うん、うん」

と、なのはは、頷く

「私に出来るなら・・・、私でいいなら・・・、って

だけど私、どうしていいかわからない

だから教えて欲しいんだ、どうしたら友達になれるのか・・・」

少しの間沈黙が訪れるが、その沈黙を破ったのはなのはだった

「簡単だよ」

「え？」

小さな声でフェイトは聞いた

「友達になるのは、すごく簡単・・・」

「・・・」

「名前を呼んで、・・・初めは、それだけで良いの
君とか貴方とか、そういうのじゃなくて

ちゃんと相手を見て、ハッキリ名前を呼ぶの

私、高町　なのは

なのはだよ!!」

「なのは・・・」

と、フェイトは小さい声で言った

「うん、そう!」

と、なのはは、頷く

「なのは」

今度はさっきより少し大きい声で呼ぶ

「うん!」

なのはは、また嬉しそうに頷く

「なのは」

と、今度は普通の音量でフェイトは言う

「うん！」

と、なのはは、涙目になりながらフェイトの手を両手で掴む

そして名前を呼んでくれた嬉しさからなのはは、涙を流す

「少しわかった事がある、・・・友達が泣いてると、同じように自分も悲しいんだ」

「フェイトちゃん！」

と、なのはは、フェイトに抱きつく

「ありがとう、・・・なのは

今は離れてしまうけど、きっとまた会える

そうしたら、また君の名前を呼んでもいい？」

「うん！、うん！」

と、なのはは、頷く

「会いたくなったら、きっと名前を呼ぶ」

するとなのはは、顔を上げ、フェイトの顔を見る

「だから、なのはも私を呼んで、

なのはに困った事があったら、今度はきつと私がなのはを助けるから・・・」

そして、遠くから見ていた木野達はどうと

「何であの子はさ、なのは、ヒック、本当に良い子だね」

「泣いているのですか？」

「あ、当たり前じゃないか、ヒック、使い魔として、フェイトが喜ぶのはさ

あたしも喜ぶ事になるのさ、ヒック、そ、それにあんただって、泣いてるじゃないか」

そう、木野のサングラスの下から、涙が流れていた

「それはそうですよ、あんなに嬉しそうなフェイト君を見るのは・

・

・・・初めてなんですから」

木野はハンカチを取りだす

「どうぞ」

「ありがとう」

そういうアルフは涙を拭く

そしてクロノは立ち上がり、フェイト達に近寄る

「時間だ、そろそろいいか？」

「うん」

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトを呼びとめて、髪を縛っているリボンを渡す

「思い出に出来るもの、こんなのしかないけど・・・」

「じゃあ、私も・・・」

といい、フェイトも髪を縛っているリボンを外し、渡す

「ありがとう、なのは・・・」

「うん、フェイトちゃん！」

「きつとまた・・・」

「うん、きつとまた・・・」

するとアルフがやってきてユーノをなのはの肩に乗せる

「アルフさんと木野さんも元気だね」

「ああ、いろいろありがとね、なのは」

「いままでありがとうございました、なのは君」

「それじゃあぼ「いきましようか」」

（え！？、ぼくは無し！？）

と、思いながらも転移する準備をする

「バイバイ、またね・・・」

クロノ君

アルフさん

木野さん

フェイトちゃん！」

するとフェイトが手を振る

それになのはも答え、手を振る

そして木野達は、転移した

これでジュエルシードを巡る事件が終わった

これを見た人ならハッピーエンドだと思うだろう

だがまだ終わらない

続きを見たい人は、『闇の書事件』を見てください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1954p/>

魔法少女リリカルなのは ANOTHER AGITO STORY

2011年4月8日16時20分発行